

瀬戸SOLAN小学校第1学年・学年通信



あなたの利き感覚は？



見ること、聞くこと、触ること。

私たちは、学習をするときに、いろんな感覚を無意識に用いています。

その中でも、最も多用するのが「見ること」です。

我々は日々、視覚という入り口から多くの情報を得て、学習を進めているということです。

この「見ること」について、1年生の学年通信に次の内容を書きました。

日付は4月15日です。

最初の視力検査の直後に発行しました。

<https://blog.seto-solan.ed.jp/?p=4231>

この通信を発行して以降、数名の保護者の方が実際に眼科を受診されたり、オプトメトリストのところで検査を受けられたそうで、学校にも連絡が入りました。

そのいずれも、学校の視力検査では両目ともに「A」だったにも関わらず、

専門家の診察や検査を受けたところ、いろんな難しさがあることが分かったという連絡でした。

この通信で紹介した以外にも「見ること」についていくつも紹介したいことはあるんですが、一気に情報を紹介すると膨大な量になるため、時機を見ながら少しずつご紹介しているところです。

ちなみに、先に書いた通り、見ること以外にもいろんな感覚を使って私たちは日々、勉強をしたり仕事をしたりしています。その感覚の違いを学ぶておくことは、私たちの生活に様々なプラスをもたらしてくれます。

例えば、【夏の海】と聞いて、みなさんは何をイメージするでしょうか？
次から近いものを選んでください。

- ①青い海、白い砂浜、晴れ渡る空
- ②ザザーという波の音やかもめの鳴き声
- ③独特の潮の香りや踏みしめた砂の熱さ

これは、「どの情報の扱いが得意か」を簡単に測るテストです。

例えば、人間には「利き手」というものが存在します。

利き手の方が、力が出るし、器用だし、滑らかな動きができるはずで
反対の手では、箸を持つことも、字を書くことも、ボールを投げることも
一気に難しくなるでしょう。

これと同じように、人間の感覚にも得意・不得意があります。

これを、「利き感覚」といいます。

ちなみに、先のテストの回答で言えば、

- ①は視覚優位
- ②は聴覚優位
- ③は体感覚優位

の傾向がそれぞれあると言われています。

視覚優位は目から入る情報を得意とし、聴覚優位は耳から入る情報を得意とし、体感覚は触れて得られる情報を得意とします。

参考までに、それぞれの優位感覚の特徴も載せておきます。

これを読んでいただいている皆さんは、どれが当てはまるでしょうか。

優位感覚	特 徴				
	目の動き	手の動き	話の特徴	よく使う言葉	ポーズ
視覚 (V)	視線は比較的上	身体の前に手のひらを下に 向けてそこにモノがあるよ うな手の動作をする	映像を思い浮かべながら視覚 的に話す 早口でテンポよく話す 話が飛ぶ	「見える」 「明らかになる」 「話が見えない」	姿勢が良い ボディランゲージが 多い
聴覚 (A)	視線は比較的中間、 左右に動く	腕組み、片手を耳や口のあ たりにあてる	言葉を大切にする 論理的 質問が多い 独り言	「理にかなう」 「～に聞こえる」 「色がうるさい」	テレフォンポーズ アシンメトリー
体感覚 (K)	視線は比較的下向き	手で自分の身体に触れる 手のひらを上または話し手 自身に向ける	ゆっくりしたテンポ 人との距離は近め 声のトーンは低め	「～のように感じる」 「腑に落ちる」 「ようやくつかめてきた」	背中は丸まり気味

ちなみに、割合としては視覚優位が 7 割で最も多く、次いで体感覚が 2 割、聴覚優位は 1 割とされています。

こうした利き感覚が異なる子たちが 30 人ほど集まっているのが教室という場所です。



教え育むものとしては、こうした感覚の凸凹についても知っておく必要があります。

知っているのと、“あたり” がつけられるようになるからです。

今の授業は音声情報に偏っていたなあとか、視覚情報をプラスすれば多くの子が授業についてこれそうだとか、こうしたことが予見できるようになると、指導の在り方にも柔軟性が生まれていきます。

例えば、ひらがなやカタカナを勉強する時。

一般によく行われるのは、何度もノートに書いて覚える方法ですが、上の

ような感覚の多様性を知っていると、指導の仕方も自ずとユニバーサルデザインに近づいていきます。

1年生のひらがな・カタカナの学習では、最初は「指書き」からスタートします。

指を一本だけピンと立てて、お手本の文字をなぞっていく学習です。

指先から、触覚刺激として文字の情報を得ることができます。

その際、「書き順」も唱えるようにしています。

ひらがなの「あ」ならば、「いち、にい、さーん」といった具合に。

こうすることで、大切な音声情報が耳から入ってきます。

この指書きを終えた後に、お手本をそっくりなぞります。

「なぞり書き」といいます。

薄い線からはみ出さないように書くことで、視覚をフルに使います。

見たり、聞いたり、触ったり。

これらの感覚をバランスよく使いながら学習を進めることが、多くの子どもたちが同時に学習を進める上では極めて大切です。

それぞれに得意な感覚が異なるからです。

これは一つの例ですが、他の教科においても他の内容においても、いろんな感覚をバランスよく使って進められることが理想です。

それでは、今回のコスモスハーモニーでは一つ趣向を変えて、読者の皆さんに問題を出します。（この通信は、保護者の方々だけでなく、先生方もたくさん読んでくださっています。）

それでは一つ、問題です。

大人から子どもへ伝えられる指示の中でも、特に多いのが「静かにしなさい」だと言われます。

教室の中でも伝えられることがあると思いますし、公共施設に行った際や電車やバスに乗る時なども伝えられることが多いはずです。

しかし、この指示は、いくつかの意味で難しい指示です。

大きなところで言えば「4つ」ほどこの指示には難しいポイントがあり、だからこそ子どもたちに中々響きません。

いったい、どんな難しさが含まれているのでしょうか。

次号を読む前にぜひ一度考えてみて下さい。

(投稿企画に多数のご参加をいただき、大変うれしく思っております。気軽に楽しくご参加いただければ幸いです。)

- ① 小学生時代のおススメ本…「読書は、宝の山への旅」そんな言葉があります。新しい考え方に出会い、新しい言葉を知り、時には冒険し、時には迷い、そして時に感涙する。価値ある本との出会いは、人生を豊かにしてくれます。そこで、みなさんが小学生時代に読んだおススメの本を教えてください。「お父さんやお母さんが子供のころに読んだおススメの本」という言葉の響きは、子どもたちの読書熱をさらに高めてくれることと思います。
- ② 小さい頃の夏休みの思い出…先日、あるクラスの学活で「夏休みの思い出を守れゲーム」というレクを行ったそうです。自分の夏休みの思い出を5枚の短冊に書き、先生がそれを当てに行くというゲームなのですが、その中で外国人の先生が「スイカ割りをした人？」を尋ねると、なんと1人も手が上がらなかったそうです。夏休みの代名詞のようなスイカ割り文化も、現代では少しずつ変わってきているのかもしれませんが。そこで、お家の方々の子どもの頃の思い出をいろんな角度から教えていただければと思います。古き良き時代の文化に子どもたちが興味を持つきっかけにもなりそうです。

↓↓↓ご参加、お待ちしております↓↓↓

[1学年通信「コスモスハーモニー」読者ページ \(google.com\)](#)